

第240回くらしの植物苑観察会 2019年3月23日(土)

## 鍋島茂義の植物学

荒木 和憲(当館研究部 准教授)

佐賀県武雄市の御船山庭園は桜の名所として有名で、現在は国の登録記念物となっている。現在のような名所となったのは明治時代の終わりごろのことで、その原型は、佐賀藩の筆頭家老で武雄領の領主でもあった鍋島茂義(1830-62)が1845年に造成した「萩の尾園」(別邸庭園)である。領主の邸宅に庭園があるのはありふれたことだが、茂義に関する口伝をまとめた書物(『浄天公 附近古武雄史談』)によると、茂義は「武雄薬園」で薬草栽培を行うほか、「苗木園」で栽培した苗木を民間に配布していたという。それだけでなく、「植物図譜」を編纂したり、蒸気式の「温室」で国内外の植物を年中栽培したりしていたともいう。茂義と植物との関わりは、庭園での鑑賞にとどまるものではなかった。

**植物図譜の編さん** 武雄鍋島家資料は、その大部分が国の重要文化財に指定されている。そのなかに「植物図絵」(仮題)という冊子が3冊ある。これは約450種にのぼる国内外の植物の彩色図を開花時期(旧暦2~10月)の順に配列したものである。口伝にいう「植物図譜」に相当するか、それに類するものであろう。



植物図絵(武雄市図書館・歴史資料館蔵)

彩色図には本草学における和名・漢名だけでなく、オランダ語・ラテン語の名称を添えたり、特徴・用途などを解説したものもある。その一例として、「葎草 ヤエムクラ」と題する図に注目しよう。葎草は漢名、ヤエムクラは和名であるが、「ホツヘコロイト」というオランダ語の名称、および「此ノ花、麦酒ヲ醸ニ用テ、気味ヲシテ猛烈ナラシムルノ至リ、性アリ」との解説が添えられる。ビールの醸造に使用して「気味」(香りと味)を猛烈にする効果があるというのである。

現在、ヤエムクラと呼ばれているのはアカネ科の植物であるが、「古い時代にヤエムクラといわれたのは本種ではなく、アサ科のカナムグラとする説がある」という(『世界大百科全書』)。たしかに、「植物図絵」に描かれる葉は、ヤエムクラの葉とは形状が異なっており、カナムグラの葉に似ている。しかし、カナムグラは「ビールの苦みをとるホップの変種」であるから(『世界大百科全書』)、「気味」を猛烈にする効果は期待できない。オランダ語名がホッペコロイドであることからすれば、「気味」を猛烈にする効果というのは「ホップ」(アサ科のセイヨウカラハナソウ)の説明であり、これをカナムグラ(当時でいうヤエムクラ)と混同したのだろう。そうだとすれば、東洋の本草学と西洋の植物学が会ってまもない時期において、植物の同定に試行錯誤している様子を伝える一例といえよう。

**蘭学の道、野田青葭との交流** 江戸時代の後半になると、オランダ船が長崎に船載した「蘭書」(オランダ語で書かれた文献)にもとづき、西洋近代科学を研究する「蘭学」が盛んになった。長崎街道のルート上に位置する武雄では、長崎警備の必要もあって蘭学がいち早く導入された。茂義は兵学・化学に重点的に取り組んだ

が、植物学と本草学との融合も目指していた。武雄鍋島家資料には蘭書はもちろん、舶来または武雄製の兵器や器物など、多種多様なモノ資料が含まれており、植物学に関しても、『植物学用語辞典』や植物標本などが確認される。

茂義が植物学を実践し、「植物図譜」を編纂できた背景には、野田青葭（源三郎）との交流もあった。青葭は長崎の薬種目利（鑑定人）で、東洋の本草学と西洋の植物学を統合的に理解しようと努めた人物である。茂義からは武雄領内に多少の扶持をあたえられていた。茂義が長崎から入手した品目・数量を詳細に記録した「長崎方控」には、青葭から取り寄せた薬材・書籍や舶来植物（鉢植・標本）がみえる。シーボルトが植物学研究に参照した『リンネ氏の大系による博物誌』については、入手困難であったため、茂義は青葭所蔵の抄訳本を借りて書写している。

1851年7月、茂義が『拾品考』を入手したことも見逃せない。これは前年に青葭がまとめあげた書物で、刊行後まもなく、茂義に献呈されたのである。10種類の植物に関する既往説と青葭の見解、そして彩色図を収録したものであるが、このうち「鳳梨」（パイナップル）に関して、青葭は1849年に武雄の「薬園」を訪問して実見したと述べている。この調査の結果、「鳳梨」は1845年にオランダ船が舶載した「アナス」と同一であると確信したのである。



拾品考(国立国会図書館蔵)

ところで、武雄鍋島家資料に含まれる「植物標本帳」（「腊葉」、4冊）は、1850年頃～62年に茂義が収集した植物を収録したもので、中国・琉球・東南アジア原産や北海道原産の植物も含まれる。たとえば、月桂樹（ローリエ）の葉には、その名称がオランダ語で“laurier”と墨書され、「園中之品」という注記もあるので、舶来品種を「武雄薬園」で栽培し、その葉を標本にする場合もあったことがわかる。こうした舶来品種の入手には、やはり青葭が一定の役割をはたしていた。1854年に入手した葉には、オランダ語名「ダートルボーム」、ラテン語名「フウニキス」「タクチリヘラ」との注記があるが、これは青葭から鑑定書付で送られてきたものである。逆に青葭が茂義に鑑定を依頼することもあった。青葭から送られてきた標本のなかには、この「蘭草」（オランダ船が舶載した植物）は長崎の「外科人」（外科人カ）に尋ねてもわからないので鑑定をお願いしたい、との一筆が添えられている。

「開国」後、オランダ以外の欧米諸国の船も各地の開港地に来航するようになり、西洋近代科学は「蘭学」から「洋学」へと展開した。1860年に入手した「サルビア」の標本には、「長崎野田園ニ於テ、英国人鑑定」との注記がある。「野田園」とは青葭の薬園のことである。植物学も新たな段階を迎えたが、1862年、「長崎方控」の記入も「植物標本帳」の編集も途絶える。茂義がこの世を去ったためである。茂義と青葭との交流は、植物学の実践（栽培・観察・標本）から生まれる知識を交換しようという学術性を帯びていた。茂義の植物学は、「蘭癖」（西洋かぶれ）でもなければ机上の学問でもなく、たゆまぬ実践に裏づけられたものであった。

.....

**次回予告** 第241回くらしの植物苑観察会 2019年4月27日（土）

「桜草の栽培史」水田 大輝（日本大学生物資源科学部専任講師）

13：30～15：30（予定） 苑内休憩所集合 申込不要